

追手門学院大学
上方文化笑学センター年報
第6号



2025年度

追手門学院大学 上方文化笑学センター

目 次

インタビュー

林 幸治郎さん（ちんどん通信社リーダー）に聞く	聞き手：広瀬 依子	1
-------------------------------	-----------	---

活動報告

クリニックラウンに関する勉強会&ワークショップ	横田 修	5
-------------------------------	------	---

インタビュー

客員研究員にきく／大坂幸司さん	聞き手：広瀬 依子	11
-----------------------	-----------	----

2025 年度上方文化笑学センター活動記録		15
-----------------------------	--	----

2025 年度上方文化笑学センター所員および研究員一覧		17
-----------------------------------	--	----

追手門学院大学上方文化笑学センター規程		19
---------------------------	--	----

林 幸治郎さん（ちんどん通信社リーダー）に聞く

聞き手：上方文化笑学センター長 広瀬 依子



※当センターでは、2025年度の学園祭に、大阪に拠点を置くちんどん通信社さんをお招きした。ちんどん屋さんは企業や店舗等の広告・宣伝を行うのが主体だが、現在ではイベント出演等も行う等、幅広い活動を練り広げている。今回の学園祭では楽器を演奏し、口上を述べながら練り歩きをしていた後、教室での公演&講演というプログラムだった。詳細はセンターの公式ホームページ内に掲載している「【報告】ちんどん通信社が学園祭に登場！（笑学センター主催）」を（2025年12月9日付）をご参照いただきたい。ちんどん通信社の設立者でありリーダーである林幸治郎さんに、ちんどん屋さんの役割や、活動への思いについてうかがった。

さまざまな場所へ出向く

昨年お邪魔した学園祭での一番の感想は、大学の校舎がとても立派で、アメリカかどこか外国へ行ったような気持ちになりました。昔の時代からタイムスリップして未来社会に来

たような気もして、楽しかったですね。また、大学の外から来られた方も学べるように、いろんなことを企画されていて入りやすく、風通しがいいと思いました。

ちんどん通信社（企業名は有限会社東西屋）は、今でもやはり、宣伝の仕事が8～9割と大部分を占めます。それ以外はイベントやパーティーの余興等が多いのですが、宗教的儀式に呼んでいただくこともあるんですよ。たとえばお寺の法要等で、阿弥陀如来を背にしてちんどんを行うこともあります。考えてみれば、お坊さんがお経をあげたり祈りを捧げたり、巫女さんが行う神楽舞では鉦や太鼓が使われます。ちんどん屋もそれらの楽器を演奏しますから、違和感はないんですよ。

海外でも何度も演奏しています。西洋も東洋も、いろいろな地域へお邪魔しましたが、アジア圏では鉦や太鼓や銅鑼等に違和感がないようです。仏教で鉦などに触れる機会が多いからではないでしょうか。お寺の鉦がボンと鳴る。日本もそうですが、その余韻も心地よいという感覚をお持ちのように感じます。西洋でも教会の鐘が鳴りますが、しんみり、余韻にひたるというのは少し違う感覚を持っていらっしゃるようです。

また、初めの頃は西洋では英語で行おうと思っていたのですが、大勢の方々の前で話そうと思うと、なかなか通用しないんです。一対一だと何とか通じるのですが、大勢の前で声を発するには雄弁術みたいなものが必要なんですね。ただ、人間は誰しも童心を持っています。童心に訴えるようにすれば、年齢や言葉に関係なく通じるものです。

歌も言葉の意味ではなくて情念を伝える。今は、そういうふう心がけるようになりました。

歩き方の大切さ

合気道や生け花を習っているアメリカの青年がちんどん屋を経験してみたいというので、一日ちんどん教室をやったことがあります。そこで気づいたのですが、太鼓を叩く以前に歩き方が違うんですよ。合気道をやっているから、日本的な足の運びや身体の使い方は学んでいるのですが、それでも違う。僕たちが簡単にやっていることが案外できないんです。太鼓を担いで楽に歩くにはどうしたらよいか。昔、天秤棒をかついで物売って歩いていた人たちが、ぶらさげている品物を揺らさずに長時間歩けるのは、なぜなのか。アフリカ等では、頭の上に水の入った大きな壺や甕を載せて歩いていらっしゃいますよね。でも、一定の歩き方をしているからこぼれません。それと同じようなことなのですが、なかなかできないんです。

歩き方のポイントは、人間は常に片足で立っていると意識することです。両足をついていても、実は右、左、右、左、と、一秒間に何十回と重心が移っているんですね。能の歩き方も、体重は常に片足に載っています。そして一瞬で体重移動する。お客さんにもわからないほどです。このように、常に一本足で立っているのだと思うことが大事です。それから、バランスにも気を配る必要があります。バランスを取ろうと思ったら足を地面にくっつけないといけない。僕も最初はわかりませんでした。経験を重ねるうちに、こういうことか、とわかるようになりました。

また、僕が習っていた日本舞踊の先生は、かなり動いても着物が乱れない。先生について踊っていたら、僕だけ着物がはだけるんです。また、雨の日に草履で出かけると、着物の裾の後ろに泥がはねてもしかたないのに、先生は、はねない。なぜだろうと、ずっと不思議に思っていました。聞いても教えてくださらないのですが、それは意地悪ではないんです。先生は子どもの頃からやっていたら体で覚えているため、できて当たり前で、どう説明していいかわからないとおっしゃるんですね。ですから、先生を見て真似しているうちに、だんだん謎がとけてくるんです。わかるまでに30～40年かかりました。

ほかにも例はあります。日本の女性が髪を洗って頭にタオルを巻きますよね。その時、昆布巻みたいに真っすぐにせず、斜めに巻いています。あの巻き方が日本の着物の着方なんです。でも、着付け教室等では、誰でも簡単にできるようにと、昆布巻みたいにしてしまう。能の方々も、どれだけ重ね着しても帯は一本だけで、これも斜めです。ちなみにインドのサリーもギリシャ彫刻も、布を斜めに巻き付けています。昆布巻きにするとミイラになってしまう。

このように、常に疑問を持つことが重要です。答はなかなか出てきませんが、ずっと頭の中に入れておくと、わかることがある。そうやってやっていると、発見があって楽しいですよ。

また、歩き方は時間の感覚にもつながります。たとえば、市場の宣伝で午前10時から午後4時までまわるとします。若い時はなかなか時間が経たない。まだ10時半か、4時までどうしよう、という感じです。ところが50代～70代ぐらいの方々は、あっという間に1時間が経つ。というのは、歩き方を変えたら時間が変わるんです。セカセカ歩いている通行人の方々と同じ歩き方でやっていると、5分、10分がなかなか経たない。それが、歩き方や身体の保ち方をやっているだけで、ほかの人とは違う、ゆっくりした時間の流れを作れるんですね。

富山県で毎年開催されているチンドンコンクールには、いつも30組90人ぐらいのチンドン屋が来ています。そこで日本人的な伝統的な所作ができていない人がどれだけいるかといえば、実はほとんどいないんです。以前は、何らかの芸能関係にいた人たちがちんどん屋さんに入ってくるのが多かったのですが、今は違います。大学を出て行くところがない、ロックバンドや演劇をやっていたけど食べていけなくて、という場合が多い。何かの芸を持って来る人がいないんです。僕が入った頃は農村歌舞伎のご出身であったり、バンドマン、ダンサーなどいろいろな方がい

らっしゃいました。そういう方たちの立ち居振る舞いや芸を見て、古典芸能を見る目が開かれたんです。先ほどもお話しした通り、その時はなかなか身につかないかもしれません。でも、30～40年たって、先生はこういうことをおっしゃっていたのだなあ、とわかることがある。気が長いんですけど、その発見を若い人に伝えたいと思っています。

そして、われわれがいちばんやらないといけないのは、お客さんを惹きつけることです。若い頃は前のめりになり、お客さんを押しつけるようなことをやってしまいがちです。そうではなくて引き寄せようと思ってやっている、お客さんが話しかけてくださる。そして、人が集まってくる。これはなかなか辛抱がいらいます。

僕が若い時、大道芸人で舞踊家のギリヤーク尼ヶ崎さんに言われたことがあります。普通の芸人さんは寄席や劇場でお客さんが私語をしたりトイレに行ったりすると気になるものです。でも、ギリヤークさんは、その場で通行人が10人、20人と通り過ぎてもいい。1分間に1人、立ち止まる人がいたらいい。もしかしたら、その人も5分経ったら立ち去るかもしれないけれど、気にせずに40分近くやっていると、テコでも動かないお客さんたちが50～60人になる。そのようにして全体に動かないお客さんを作ってから、決め技をするんです。昔の大道芸は皆そうなんですが、ギリヤークさんは本能的にされていましたね。

天下泰平を願って

僕の生まれ故郷である福岡・博多には、松囃子（まつばやし）という中世の芸能があります。いったん途絶えてまた復活していますが、謡曲で舞い、鼓と能管で演奏し、口上を述べる人もいます。今は大きなフェスティバルをやっていますが、もともとは家々を廻っていたんですね。そこに、ちんどん屋との関係を感じます。というのは、ちんどん屋がお店の宣伝でお邪魔する場合、以前はまず、そこでお神酒をもらったものなんです。開店する時にはいろいろな人からお酒をいただいて神棚に飾ります。そのお酒を神様が直接飲むことはできないから、お下がりとして僕たちがいただく。神様のかわりに僕たちが飲むというわけです。かつてはそういう感情を持っていたのだと思います。

最近、ちんどん太鼓の前の部分に「天下泰平」と書いた札を付けています。千秋万歳、天下泰平、万民法楽を望みながら、このまちを回っている、という意味です。スポンサーとしてご寄付をいただいた方々のお名前は、背中側に書きます。これにも意味があって、たとえば美容室の宣伝だとします。街を回っている時に別の美容室の前を通ると、そこの方は面白くないですね。ですから、私たちは天下泰平を願いながら街の厄を払っているんですよ、というかたちにするとやりやすくなるし、皆さんが喜んでくださいます。

また、見ている人は僕たちの出で立ちやパフォーマンスを見て、何らかの心の世界に入っているとも感じます。皆さんそれぞれの思いをどんどんふくらませていくのが僕たちの役割です。決して僕らの芸が上手ということではなく、存在だけで想念が生まれる。物理的な宣伝プラスいろんな思いがあるのです。

口上をお店の前で言うにしても、お店の人に成り代わって、天に向かって宣言するんです。この店は公明正大でお客様の前で一所懸命やります、と言うと、神に対する宣言になる。すると依頼主さんは、これでこの店は大丈夫、繁昌する、とお思いになります。誰もいない場所でも同じようにします。というのは、僕自身が、アパートで寝ていた時に聞こえてきたちんどん屋の演奏に興味をもってこの世界に入ったからです。そのちんどん屋さんには僕の姿は見えていない。だから、見えているだけがお客さんではない。常に劇場の舞台に立っているようなつもりでやらないといけません。ビルの中で働いている人に、ちらっとでも音が聞こえるように。誰もいないから適当でいい、ということではありません。

素朴な思い

芸能は、歴史をさかのぼるとほとんど御祈祷と融合されています。芸能者は、あの世と交流してくれる。お医者さんでは治してもらえないことを治してくれるかもしれない。皆さんはそう思って、厄払いをしてもらうわけです。天神祭でも、なぜあんなに暑い時に人が集まるのか。そこに賑わいがあるからです。賑わっているところに神様が下りてくるといふ民間信仰のようなものが感じられる。賑わっているところに行くのと神様と交流できるのではないかという信仰があり、僕たちが賑やかに歌舞音曲をやっていると福の神が下りてくる。そういう素朴な思いが、皆さんの中にあるのではないのでしょうか。その思いにのっとなって、僕たちはちんどん屋を行っています。また、受け取る方が自分でふくらませて下さるんですよ。たとえば仏壇の前とか、大きな災害のあった場所で演奏することがあります。依頼して下さる方々にとっては、亡くなった方々が見えている。若い時にはわかりませんでしたが、年齢とともにわかるようになりました。

また、年齢を重ねると、いろんなことから自由になると思いますので、冒頭にもお話したように、これからは、過去から未来へやってきた人のように、今の風物を楽しみたいです。そして、一緒に仕事をしている30代の娘が継承できるようになればと思っています。私には孫もいるのですが、幼稚園の卒園式で将来何になりたいか、という発表が行われた時に「チンドン屋になります」と話したんです。会場中が大爆笑でした。幼いですからそのうち言わなくなるかもしれませんが、今はよかったですと思っています。

ちんどん業界全体としては、近年、若い人は増えてはいないので、若い人に来てもらえるように、また、一般の人が気楽に来て一緒に勉強できるようなら場所を作れたらと考えています。さらに、活動を通して、若い人がちんどんだけではなく、あらゆる古典芸能に目を開いてくれれば嬉しいです。だまだ発見することはいっぱいあると思いますので、悪戦苦闘しながら過ごそうと思っています。

【活動報告】

クリニックラウンに関する勉強会&ワークショップ

上方文化笑学センター所員・社会学部 横田 修

2025年10月24日（金）、上方文化笑学センターは「クリニックラウンに関する勉強会&ワークショップ」を開催した。クリニックラウンとは、入院生活を送るこどもの病棟を定期的に訪問し、遊びとユーモアを届け、こどもたちの笑顔を育む道化師のことである。

当日は、認定NPO法人日本クリニックラウン協会（JCCA）事務局長の熊谷恵利子氏を講師に迎え、日頃の活動について話を伺った。また後半には、実際の活動を模したワークショップを通して、その役割や技術について理解を深めた。参加者は体を動かしながら体験し、会場は笑いに包まれた。

まずはクリニックラウン活動についての報告である。熊谷氏は、スポンジでできた「赤い鼻」を付けて登壇した。会場の空気が一瞬で和らぐ中、こどもたちに語りかけるような柔らかい口調で講演が始まった。



図1 熊谷氏登場

1. 冒頭のメッセージ：「寄り道」を楽しむ心

冒頭、本日の目標として「寄り道を楽しむ」というお題が出された。レジユメにあるAとBの二点を結ぶ際、「真っ直ぐ引くのではなく、寄り道をして、できる限り時間がかかるような線を描いてほしい」と熊谷氏は言う。

「最近では効率化やコストパフォーマンスといった言葉がよく使われます。しかし、少し寄り道をしたり、いつもと違う道を通ったりすることで、新しいワクワクを見つけることもあるのではないのでしょうか」。この呼びかけは、参加者の心を日常の「効率」から解き放つ決意表明となった。

2. クリニクラウンの歩みと役割

「クリニクラウン (CliniClown)」とは、Clinic (病院) と Clown (道化師) を合わせた造語で、「臨床道化師」とも訳される。日本での歴史は2004年に遡り、2005年に日本クリニクラウン協会 (JCCA) が設立された。

JCCAは「すべてのこどもにこども時間を」を合言葉に活動している。入院中のこどもたちは、治療への不安の中で「こどもらしく過ごす」ことが難しい状況にある。クリニクラウンは、単なる慰問ではなく医療チームの一員として、こどもたちが本来持っている「生きる力」を取り戻す手助けをしている。現在は全国で39名のクリニクラウンが活動しており、プロのエンターテイナーから会社員、医療・福祉従事者まで、多様な背景を持つメンバーがその役割を担っている。

3. 「完璧さ」よりも大切な「気づき」のスキル

熊谷氏は「声」と「気づき」の大切さについて語った。声のトーンが場にもたらす影響は非常に大きい一方、常に完璧でいることの難しさにも触れた。事務作業中に素っ気ない態度をとってしまう自分を認めつつも、その瞬間に「しまった」と気づき、あとで声をかけ直す。完璧を目指すのではなく、自分の心の動きに敏感であること。その「気づき」こそが、こどもと向き合う上で何より大切であるというメッセージは参加者の心に深く響いた。

4. 「笑顔」から「こども時間」へ

発足当初の「入院中のこどもに笑顔を」というスローガンは、後に「すべてのこどもにこども時間を」へと改められた。「本当にしんどいとき、人は笑顔になれない。笑顔にはパワーが必要なのだ」とこどもたちから教わったからである。

脳性まひなどの疾患で表情を動かせないこどもも、心の中は自由で、さまざまなことを感じている。また、周囲を慮って「頑張って笑顔を作っている」こどもたちもいる。そんなこどもたちの健気さと葛藤を、大人は知っておかなければならない。点滴や行動制限のある入院生活の中で、いたずらっ子の表情を見せたり、何かに驚いたりする「ワクワク、ドキドキする時間」を取り戻すこと。それこそが、JCCAが大切にしている「こども時間」の本質なのだ。

5. 「どうしたらできるか」——コロナ禍での挑戦

新型コロナウイルスの感染拡大は病院訪問という活動フィールドを奪ったが、協会は「オンライン訪問」という新たな一歩を踏み出した。「できるか、できないか」ではなく「どうしたらできるか」を考える。これは、協会のメンバーがこどもたちから教わってきた姿勢であった。

かつて、反応が乏しいことを理由に訪問を断られそうになった病室で、クリニクラウンの奏でる音に合わせてこどもの足が動いたことがあったという。それを「反射」と片付けるのではなく、「一緒にダンスしているんだね」とユーモアで包み込む。想像力さえあれば、病室は海にもなり、どこへでも行ける。「遊びの無限の可能性」を信じる姿勢が、コロナ禍においても活動を支えたそうだ。

6. めいちゃんが教えてくれた「伝えること」の力

活動の存続に悩んでいた時期、背中を押したのは、5歳で亡くなった「めいちゃん」からの手紙であった。動画で紹介されたその手紙には、亡くなる直前まで会いたかったという想いと、真っ直ぐな「ありがとう」の言葉が綴られていた。

「想いは言葉にして伝えないと届きません。そして受け取った人にとって、その言葉は大きな生きる力になる」。熊谷氏は、身近な人への感謝を口にする事の大切さを、会場へ静かに語りかけた。

7. クリニックラウンが体現する「人間らしさ」

ワークショップを前に、熊谷氏は「なぜクリニックラウンなのか」という問いへの答えをこう締めくくった。「クリニックラウンは、自由な発想を持ち、喜びを素直に表現します。同時に、失敗やためらい、嫉妬といった人間の『欠点』とされる部分も隠さずオープンにします。だからこそ、人は共感し、自分を肯定できるのではないのでしょうか」。底抜けに前向きな姿に触れたところで、いよいよワークショップへと移った。

8. ユーモア・コミュニケーションへの挑戦

講演に続き、後半は参加者全員が円になり、実際のクリニックラウンの視点を体感するワークを行った。まず行われたウォーミングアップでは、表情筋をほぐしながら、自分の立ち位置や距離感（ノンバーバル・コミュニケーション）が、言葉以上に自分自身の状態を発信していることに気づかされた。



図2 ワーク開始

9. 「うまくいかないこと」を面白がる

「拍手回し」や「びよんゲーム」では、アイコンタクトの重要性が強調された。視線を交わすことで「あなたに伝えている」という意志を明確にしていく。しかし、ルールが複雑になるほどハプニングや失敗が相次ぐ。そこで熊谷氏は、「コミュニケーションは本来、思い通りにいかないもの。そのズレこそを面白がり、関係を深めるチャンスだと捉え直してみてください」と説いた。

10. 失敗を喜び、「一緒に」を体現する

二人組で声を掛け合う「1, 2, 3 ゲーム」や「ピンポンゲーム」では、失敗したときに「しまった！」と笑い合える空気が会場に広がった。「失敗した自分を責めるのではなく、『やっちまった！』と切り替えて次に進む。このしなやかさこそが、大人の大切なスキルである」。また、相手に対して「やってあげる」のではなく「自分も一緒に遊ぶ」という対等なエネルギーが通い合ったとき、会場のあちこちに本物の「こども時間」が流れるような笑顔が見られた。



図3 ワークの様子

11. ワークのおわりに

最後は、共にワークを乗り越えたパートナー同士、清々しい拍手で締めくくられた。遊びを通じて、参加者は「寄り道」の豊かさと、不完全な自分をも包み込むユーモアの力を肌で感じる事ができた。クリニックラウンが病棟に届けているのは、単なる娯楽ではなく、どんな状況下でも「その人らしく在ること」を肯定する、温かな眼差しそのものなのである。

12. 結びに代えて：誰もが持つ「クラウンハート」

ワークショップの締めくくりに、熊谷氏は「逆転の発想」と「リフレーミング」の重要性を説いた。「5 + 2 の答えは7だが、逆に『答えが7になる数式』を考えれば、その可能性は無限に広がる」という例えは、視点を変えることで世界の見え方が劇的に変わることを示している。

失敗を「おいしい」と捉え、短所を長所へと読み替え、相手の拒絶さえも「関わりたい気持ちの裏返し」と捉え直す。状況は変えられなくても、視点や見方を変えることで、自分の行動や相手との関わり方は変えられると熊谷氏は言う。

「クラウンは、弱さを肯定する存在です。完璧でなくてもいいという安心感を届け、立場や役割の境界線を軽やかに越えていく。人は完璧ではないからこそ、つながることができるのです」

最後に贈られた「自分の中にある『クラウンハート』を大切に」という言葉は、参加者一人ひとりの心に温かな灯をともした。多様性を認め合い、違いを面白いがる。そんな成熟した社会への願いが込められた充実の勉強会となった。

客員研究員にきく／大坂幸司さん

聞き手：上方文化笑学センター長 広瀬 依子

※大坂幸司さんは、当センター客員研究員。折に触れ、センターの活動への協力やアイデアをいただいている。本学OBであり（1982年卒業）、文学部東洋文化学科卒業生による「東洋文化の会」（学部同窓会）の設立・運営やビジネス交流会の開催等、さまざまな活動を担う。旅行会社に勤務していた頃には、お客様が笑顔になる旅のコーディネーターを行ってきた。さまざまな経験を通して、笑いについての見解をお話いただいた。

旅との関わり

私は生まれも育ちも名前も大阪（大坂）です。昭和の大阪の子どもたちの土曜日といえば、授業は午前中で終わり。昼に帰ってきてご飯を食べながら吉本新喜劇を見る、その後は松竹新喜劇という流れでした。小さい頃から笑いの芸を目にしてきたわけです。加えて大阪の土壌として、自然とボケとツッコミができる。私自身もそういう中で育ちました。ですから、お笑いは子ども時分から好きでした。当時、テレビに視聴者参加番組がいくつかありましてね。笑福亭仁鶴師匠の『仁鶴と遊ぼう』という番組内の「落語入門」のコーナーに小噺で出演させていただいたり、ほかにもいくつか出してもらいました。周りにも私と同様にお笑いが好きな人がたくさんいましたね。

そんな私が追手門学院大学を卒業した後、旅行会社に勤務しました。私の父が旅行好きで、よく家族で1泊くらいの旅行に出かけたことが、旅を好きになったきっかけです。父も寛大というか、土曜日やったら学校を休んでも問題ないやろう、と土曜の朝から出かけたことが記憶にあります。また、父方の親戚にも旅行好きがいましたね。その家には時刻表があったんです。当時ですから分厚い本です。見せてもらったところ、とりこになりましたね。時刻表が愛読書になり、以後、お小遣いで毎月買うようになりました。

大学時代にはいろいろな活動をしましたが、自分に何ができるのか。人と接するのも旅も好きでしたので、旅行会社に就職したというわけです。初めは東京勤務で、11年を過ごした後、関西へ異動となり、故郷へ帰ってきました。入社1年目～2年目ぐらいは、同級生の新婚旅行を何組も世話したことを懐かしく思い出します。

実は入社前は、旅行会社に営業があるとは知らなかったんです。店舗のカウンターでツアーをお世話したり切符を発行するのが仕事だと思っていました。入ってみると、男性は外回りの営業をすることから始まりました。先輩について教えてもらいながら、切符の配達や企業訪問をしましたね。飛び込みセールスから始まりましたので最初はつらかったですけれど、今となっては東京と関西の両方で仕事をさせてもらえて、勉強になりました。

添乗も、もちろん担当しました（これまで、海外180回・国内400回ほど）。今は専任の添乗員がいますが、私の在職中は営業も添乗も行っていました。バック旅行がほとんどでしたね。初年度から添乗に行きました。最初は、海外旅行に行くお客様をホテルから空港までバスで送迎するという仕事でした。これも添乗です。その後、6月にハワイの添乗についていき、その後から単独での添乗です。その頃、大学生の卒業旅行の一番人気はヨーロッパで、2～3週間ぐらいの日程でした。特に東京で仕事をする場合、その添乗を行うのは登竜門のようなもので、私も入社した年度に行きました。目的地はエジプト&ヨーロッパで15日間。それまで国際線の飛行機には1回しか乗ったことが

なく、エジプトにも行ったことがない。でも断れませんので、覚悟を決めて行きました。飛行機のトラブルで出発日が延びたり、いろんなことがありまして、大変でした。ただ、よく言われることですが、トラベルとトラブルは紙一重なんです。そういう経験は若いうちにしておいた方がいい。勉強になるし、度胸もつきます。

ピンクの蝶ネクタイ

私がいた頃の東京では、大阪ほどお笑いが浸透していませんでしたね。お客さんの気質も違います。東京の方々はあっさりしている。大阪の方々はボケ・ツッコミを求めてこられるし、ご自分たちでもそういう会話をされています。また、商売のまちということもあり、厳しく細かい面もお持ちです。「これなんぼや」「こっちの方が安いちゃうの」「負けてえな」というようなやり取りがよくありましたね。

この旅行は何やしょうもないなあ、というお声も耳にする

ことがありました。けれども、厳しいのですが、本音でおっしゃるので、その方がありがたいんです。そういう方々と、その後もずっとつながりが続くことも珍しくありません。

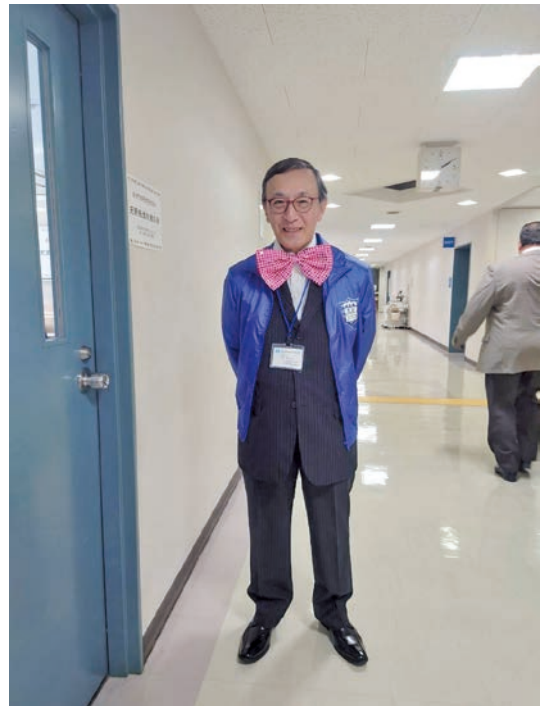
以前から思っていることですが、旅行に来られる方はお金を払って楽しみに来られている。われわれがネクタイを締めて、しかめっ面をして難しいことを言っても、お客さんは面白くない。ただ、添乗員としては言うべきことは言わないといけません。集合時間を守ってください、ここには行かないでください、煙草は吸わないでください、等です。それをやんわりと言うように心がけてきました。そのために、私はジョークやユーモアを混ぜながらお話をしているつもりです。

そのような姿勢になったのは、東京勤務を終えて大阪に帰った頃からですね。特に東京での最後の方は、研修など、楽しみの旅とは少し違うツアーをよく担当していました。そこで冗談は言えませんが、ビシッと話していましたね。

大阪へ帰ってから、大きなピンクの蝶ネクタイを締めてお客さんの前に出ることが増えました。これというきっかけはないのですが、やはり他の人と違うことをせなあかんなあ、と思ったんです。そんな時、バラエティショップのパーティーグッズ売り場で、蝶ネクタイを偶然目にしました。一回これを締めてみようか、と思って購入し、まずは本学の校友会でしてみました。「あほちゃうか」ぐらいは言われるでしょうが、それほどお叱りも受けないのでないか、と思ったんです。それが意外とうけましてね。皆さん楽しんでくださったので、私も嬉しくなりまして、いろんな色を揃えました。すると、「こんな色もあるんですね」と皆さんが喜んでくださる。

最近では、お客様が手で蝶ネクタイの形を作り、「大坂さん、今日は、これは？」とおっしゃってくださる。ですから、これは自己アピールの部分で大事だと思っています。もちろん、ユーモア、ジョークの場面でも大事です。自己紹介をする時も、TPOを考えながら、少しくだけた、人と違う、印象に残る自己紹介をしたいと常々思っています。

ネクタイ以外にもあります。旅館に泊まる時は広間で皆さんと食事をするがありますが、その際は、普通はスーツ姿です。でも雰囲気をやわらげたい。とはいえ、われわれ添乗員がお客様と同様に浴衣というわけにはいきません。そこで、上着を脱いで法被を着ることにしました。そうするとお祭りといえますか、雰囲気が出ますよね。国



蝶ネクタイ姿の大坂さん

内の温泉旅行や、海外ではパーティーの時が多いのですが、で法被を着ていると、特に欧米の方が喜んでくださるんです。一着、差し上げたこともあります。話のきっかけにもなりますし、良い材料ではないでしょうか。会社からも何も言われませんでした。たとえば裸踊りや言葉の暴力等は問題ですが、度を越さず、面白おかしく、お客さんが喜んでくださることを心がけています。幸い私は子どもの頃からお笑いに親しんできましたので、素地があります。面白ければ、お客さんは素直に笑ってくださいます。和やかになり、ほんわかされる。

和やかになるように

研修や視察のツアーには、オーガナイザー（主催者）がいらっしゃいますので、われわれがあまり出しゃばってもいけない。しかし、ホテルの部屋の使い方やこの後の予定などについては、われわれがご案内しないとイケませんから、そういう場面ではきちんとして、ユーモアは時折入れます。たとえばベトナムで第1班の担当をした後、翌日に第2班が来られた。その時に言うのは「ようこそベトナムへ」。そういう私も昨日来たばかりなんです。それを第2班の皆さまもご存じですから、1日しかないのに……と、空気がゆるみ、和やかになる。

また、海外旅行の場合は時差がありますので、できるだけ早く旅先の時刻に時計を合わせてください、とお客様にお伝えしなければいけない。その時に「時計を合わせてください」と言うのと、「日本時間のままだと、明日の集合時間より1時間早くなってしまいます。そうすると、集合場所のロビーには誰もいないという状況に……」と言うのでは違うんです。一言でずいぶん変わるんですね。また、バスに乗る時の忘れ物確認でも「貴重品」ではなく「この旅行のために買った貴重品」と付け加えると和む。「慌てて部屋のスリッパのまま来られた方、いらっしゃいませんか？」等もあります。実際にたまにあるのです。私も洋服をホテルの部屋に置いたまま、という失敗をしました。自分のミスも混ぜながら確認事項を話すと皆さんが聞いてくださるんです。

このような話の流れは、特定のお笑いの方を参考にしたということではないのですが、漫才の夢路いとし・喜味こいし先生の漫才は大好きで、真似させていただいたこともあります。私の場合は自分でボケて自分でツッコんでいるのですが、そういう方々のおしゃべりを頭に入れて、自分で作っていますね。お客様にはそれぞれの受け止め方がありますが、終わった時に「楽しかった」「面白かった」とおっしゃっていただくと嬉しいものです。次の機会にご指名いただく、ということにもつながります。もちろん基本は、手配等をきちんと進めていく。プラス、総合的な部分でご評価いただき、選んでいただけるのはありがたいことです。

旅は仕事ではありますが、自分も楽しめないとお客さまも楽しめないと思うんです。私はすぐ顔に出る方なので、よけいにそう感じます。根底は、お客様や相手の方を楽しませる。そして、相手の方が興味を持っていらっしゃることをつかみながらお話をし、笑いに持っていく。それを心がけてお話をするようにしています。

研修旅行や視察旅行では、昼間は公的な施設に行ったりしますので、そこでは出すぎないようにしています。ただ、夜になると、皆さんが少しほっとされる。特に日数が長い時は、日本食や日本酒が恋しくなります。そういう時はざっくばらんに接して、強弱をつけていきます。保険外交員の女性の方々が集まったイタリア旅行に添乗をしたことがあります。バスの中で説明している時、私がポロっとマイクで「すまのう」と言ってしまったんです。これがうけましてね。夜でしたし、何日か経って皆さんも疲れていらしたのですが、この一言で雰囲気やわらぎました。メリハリが必要なのですね。

コミュニケーションに期待

お話したように、いろんな素地があって、私はここまで生かさせていただきました。

笑学センターでは、お互いに名前はわかっていますが、なかなかコミュニケーションを取る機会がないのが実情です。全員においでいただくのは難しいでしょうが、何かそういう場があれば良いのではないのでしょうか。われわれのような外部の人間も含めて、一般の人に向けてのお話ができる場があればいいと思います。講演会、フォーラムのようなかたちも良いと思います。そうすることで興味なかった方も来られるかもしれないですし、追大にこういうセンターがあったんや、と認識していただけるかもしれません。できれば、僕たちも参加させていただいて、芸人さんにお越しいただくのもひとつの案ではないのでしょうか。

2025 年度上方文化笑学センター活動記録

2025 年

- 5 月 12 日 第 1 回所員会議 於：Google meet（オンライン）
- 7 月 11 日 第 17 回 道修町たなみん寄席「落語で巡る博覧会」
於：田辺三菱製薬株式会社 講演・対談：広瀬依子
- 9 月 30 日 第 2 回所員会議 於：Google meet（オンライン）
- 10 月 24 日 「クリニックラウンに関する勉強会&ワークショップ」
（ゲスト：熊谷恵利子氏／認定 NPO 法人日本クリニックラウン協会 理事）
於：追手門学院大学総持寺キャンパス BNC205 教室
- 11 月 3 日 講演&公演&練り歩き「始原を巡るチンドン屋の世界～チンドン屋ことはじめ～」
（ゲスト：林幸治郎氏ほか ちんどん通信社）
於：追手門学院大学 学園祭（総持寺キャンパス）
- 11 月 22 日 第 18 回 道修町たなみん寄席「『神さん』と『落語』になった動物たち」
於：田辺三菱製薬株式会社 講演・対談：広瀬依子

2026 年

- 1 月 16 日 林幸治郎氏インタビュー
- 1 月 26 日 大坂幸司客員研究員インタビュー
- 2 月 3 日 第 3 回所員会議 於：Google meet（オンライン）
- 3 月 31 日 「上方文化笑学センター年報 第 6 号」発行

メディア掲載

社会学部舞台表現プロジェクト（通称 STEP）で、学生が執筆した脚本による公演『此处じゃない何処かへ』が行われたことに関する記事：『「死と向き合う若者たち」を演劇で 脚本は適応障害を経験した大学生』
朝日新聞 2025 年 6 月 24 日（火）掲載。

【Web 版記事 URL】 <https://digital.asahi.com/articles/AST6R32WNT6ROXIE003M.html>

テレビ・ラジオ出演

- ・広瀬依子 NHK ラジオ第 1 『関西発ラジオ深夜便』
かんさい玉手箱～古典芸能情報コーナーに、関西の舞台芸能に詳しい専門家として出演
放送日：4 月 12 日（土）「芸能の中の悪役」／6 月 14 日（土）「シニア演劇のいま」
8 月 16 日（土）「戦争と芸能」／10 月 11 日（土）「芸のまち・道頓堀」
12 月 13 日（土）「講談の魅力」／2 月 13 日（土）「芸能の中の鬼」

2025年度上方文化笑学センター所員および研究員一覧

センター長	広瀬 依子	文学部 講師（上方芸能、伝統芸能）
所 員	浦 光博	追手門学院大学 教授（社会心理学、行動科学）
所 員	佐藤 貴之	文学部 准教授（日本近現代文学）
所 員	辰本 頼弘	社会学部 教授（スポーツ科学）
所 員	横田 修	社会学部 教授（演技・演劇教育論）
客員研究員	大坂 幸司	追手門学院大学校友会 理事、元(株)日本旅行勤務
客員研究員	大谷 邦郎	グッドニュース情報発信塾 塾長、NPO 法人 DDAC（発達障害を持つ大人の会） 監事、 元・MBS ラジオ報道部長
客員研究員	木村 未来	元・読売新聞文化部記者
客員研究員	瀬沼 文彰	西武文理大学サービス経営学部 准教授、日本笑い学会理事
客員研究員	高垣 伸博	文学部 非常勤講師、大阪府立上方演芸資料館・ワッハ上方「プロモーション委員会」事 務局（プロデューサー）
客員研究員	鳶野 克己	立命館大学 文学部 特任教授、日本笑い学会会長
客員研究員	福山 侑希	奈良市子どもセンター、臨床心理士／公認心理師
特別顧問	坂井東洋男	追手門学院大学 名誉教授、元学長
特別顧問	西上 雅章	通天閣観光（株） 代表取締役会長、追手門学院大学 客員教授

追手門学院大学上方文化笑学センター規程

令和2年2月17日

制定

(設置)

第1条 追手門学院大学学則第58条に基づき、追手門学院大学（以下「本学」という。）に、上方文化笑学センター（以下「センター」という。）を設置する。

(目的)

第2条 センターは、本学の総合大学としての学問的蓄積を生かし、人類の誇りうる能力であり文化である笑いを対象にした、学問・文化の集積拠点となり、教育・研究活動の発展に寄与することを目的とする。

(事業)

第3条 センターは、前条の目的を達成するため、次の事業を行う。

- (1) 笑いを中心とした上方文化に関する情報発信
- (2) 笑いとユーモアを活用した教育プログラムの開発
- (3) 上方芸能及び笑いの文化に関する図書及び資料等の情報収集並びに提供に関すること。
- (4) 講座、講演会、シンポジウム等の開催
- (5) その他センターの運営に関すること。

(センター長)

第4条 センターに、センター長を置く。

- 2 センター長は、学長の推薦により常任理事会の議を経て学長が任命する。
- 3 センター長は、センターを代表し、センターの運営を統括する。
- 4 センター長の任期は、4月1日から2年間とし、年度の途中で任命された場合は、就任した年度の翌年度の4月1日から起算して2年を経過する日までを任期とする。ただし、再任を妨げない。

(所員)

第5条 センターに、所員を置くことができる。

- 2 所員は、大学の専任教職員の中から、第2条の目的を達成するために必要な専門性を有する者を所長が推薦し、学長が委嘱する。ただし、任期は2年とし、再任を妨げない。

(客員研究員)

第6条 センターに、客員研究員を置くことができる。

- 2 客員研究員は、学外の有識者の中から、第2条の目的を達成するために必要と判断される者をセンター長が推薦し、学長が委嘱する。ただし、任期は1年とし、再任を妨げない。

(特別顧問)

第7条 センターに、特別顧問を置くことができる。

- 2 特別顧問は、センター長の推薦により学長が任命する。
- 3 特別顧問は、センターの事業推進についてセンター長に助言等を与える。

(事務の所管)

第8条 この規程に関する事務は、研究企画課の所管とする。

(規程の改廃)

第9条 この規程の改廃は、大学教育研究評議会の議を経て学長が決定する。

附 則

- 1 この規程は、2020年4月1日から施行する。
- 2 追手門学院大学笑学研究所規程（2015年9月4日制定）は、2020年3月31日をもって廃止する。

附 則

この規程は、2020年4月1日から施行する。

附 則

この規程は、2022年4月1日から施行する。

追手門学院大学上方文化笑学センター年報 第6号

2026年3月31日発行

発行者：追手門学院大学上方文化笑学センター
〒567-8620 大阪府茨木市太田東芝町1番1号
TEL：072-665-9217（研究所・センター窓口）

印刷所：協和印刷株式会社
〒615-0052 京都市右京区西院清水町13
TEL：075-312-4010
